わが家は魔法の王国亡命ハーレム

羽沢向一

挿絵◆或真じき

試し読み版

2DB
二次元ドリーム文庫

第一章　異世界から魔法の巨乳王家がやってきた　006
第二章　緊急司令 プリンセスの処女を頂戴！　072
第三章　勅命 黒の処女王陛下を白く染めろ！　129
第四章　タブーを破る三人の交わり×2　170
第五章　ハーレムで世界を平和に　231

登場人物紹介

シーナ・ヴィル・マーハ

サンドラの妹。真面目な性格で責任感が強く、かならずミナから王座を奪い返すと、固く決心している。

サンドラ・ヴィル・マーハ

優しくちょっとエッチなマーハランドの元女王。政権争いに敗れたため、妹を連れて裕也の家へ亡命した。

ミナ・フルル・マーハ

マーハランドの現女王。自信家で負けず嫌い。ヴィル・マーハ家に戦争を仕掛け、見事王座を奪取した。

塚森裕也（つかもりゆうや）

ごく普通の高校生……のはずだったが、シーナたちと出会いマーハランドの王家の血筋であることが判明。

第一章　異世界から魔法の巨乳王家がやってきた

塚森裕也が高校からの帰りに毎日寄り道する本屋へ入ろうとしたとき、ブレザーのポケットのスマートフォンが振動した。電子万引きを疑われないように本屋の前から離れて、画面の文字を見つめ、首をかしげる。

『突然だけど、重大な用事があるので、大至急帰ってきなさい　母』

「なんだ、これ？」

と、思わず声が出てしまう。

親からこんなあいまいなメールが送られてくるのは、はじめてだ。よいことがあっても、誰かの事故や不幸が起きても、いつも文章は明瞭。どうして今日にかぎって、用事の内容を書かないのか、わからない。

裕也は不安を煽られて、気がつくと駆け足になっていた。

十分足らずで自宅の前に到着したが、今朝、玄関から出たときと比べて、家の外観にも変化は見られなかった。庶民の住宅としてごく平凡な二階建ての前には、人だかりもなければ、パトカーも救急車も消防車も止まっていない。

しかし玄関のドアを開けると、上がり框に母親だけでなく父親も立っていた。

「あれ、父さん、会社は？」
「有給休暇を取った。父さんたちのことはいいから、早く上がって、居間へ行け」
「なに？」
「見ればわかる」
そして、見てもわからなかった。裕也が居間に足を踏み入れた途端、凛とした大きな女の声を浴びせられる。
「マーハランド王国のアレクサンドラ・ヴィル・マーハ女王陛下ならびにアレクシーナ・ヴィル・マーハ王女殿下の御前である！　控えよ！」
「は、はい！」
日本人の血のなせる業なのか、裕也は思わず返事をして、『水戸黄門』の登場人物さながらに畳に正座してしまった。
さすがに額を畳につけて土下座はしなかったが、唖然として室内をながめる。
（な、なんだ、これ⁉）
塚森家の居間は畳敷きだ。そこにダイニングキッチンから持ってきた二脚の椅子が並び、二人の女が優雅に腰かけていた。
右側の椅子には、上品な淡いピンクのロングドレスを着た、金髪の美女。頭には黄金のティアラを飾っている。

左側の椅子には、純白のロングドレスを着た、金髪の美少女。頭には銀のティアラを飾っている。
二人は確かに女王と王女と呼ばれるのにふさわしい外見だ。
さらに椅子の背後には、明るいブルーの服に白いエプロンドレスをつけた、どこからどう見てもメイドな若い美女が仁王立ち。
メイドは右手に畳から天井まで届く長い棒を握り、そこに大きな布が結びつけてある。不思議なことに、畳一枚分はありそうな布は、なんの支えもなしに横に広がり、大輪の赤い薔薇と白い薔薇が並ぶ豪奢な刺繍を見せつけている。
（どうして、ぼくの家に、女王様と王女様とメイドがいるんだ⁉）
唖然として三人の美女を見つめる裕也へ、メイドがけわしい顔つきで再び凛とした声を放った。
「アレクサンドラ陛下とアレクシーナ殿下に不敬である。頭が高い！」
「エリル。あなたこそ口をつつしみなさい」
ピンクのドレスの女王が椅子から立ち上がり、叱責の声をあげる。二人ともアクセントにわずかな訛りがあるが、きれいな日本語の発音だ。
「世が世なら、裕也様こそマーハランド王国の国王であらせられたのですよ」
そのまま女王は前へ進み、正座する裕也の前にひざまずいた。あらわな胸の谷間から甘

い香りが立ち昇り、裕也の鼻腔をくすぐる。
目の前でほがらかな笑みが咲き誇り、澄んだ声音があふれた。
「はじめまして、裕也様。どうぞ、お楽にしてください。わたくしはアレクサンドラ・ヴィル・マーハ。お気軽にサンドラと呼んでもらってけっこうです」
「えーと、サンドラさん」
今度は背後から、母親の叱責が飛んできた。
「だめよ、裕也。サンドラ陛下とお呼びするのよ。きちんとご挨拶をして」
裕也は首をひねって母親の顔を見た。冗談を言っている顔ではなく、真剣な顔で息子と、美女をしっかりと見つめている。いっしょにいる父親は玄関で出迎えられたときからつづく困惑の顔だ。
裕也は顔を前へもどして、もう一度、相手の名を口にする。
「はじめまして、サンドラ陛下」
「はい、裕也様」
女王と呼ばれるサンドラの年齢は二十代なかばだろうか。
近くで見ると、明るい色あいの金の長い髪が、やわらかく波うっている。
色白の顔には、明るい緑色の瞳。高い鼻も、ふっくらした唇も、端正に整っていた。それでいて美人にありがちな冷たい感じはなく、優雅でおおらかな印象だ。

頭の黄金のティアラは、明るい色あいの金髪よりも濃い輝きを放つ。間近で見ると、とても手のこんだ精密な作りで、ひと目で天才職人が精魂をこめたものだとわかる。

着ているものは上品な淡いピンクのロングドレス。まるで千葉県にある夢の国のパレードで見るような、リボンやレースがたっぷりとあしらわれて、ふわふわヒラヒラのゴージャスなドレスだ。

ただ夢の国のヒロインたちとは違い、ドレスの胸の部分が大きく開いている。おかげで豊満な乳房がよく見えた。雑誌のグラビアなら確実に『爆乳』と大きな文字で書かれる白い胸が盛り上がり、左右の乳球の間に刻まれた谷はどこまでも深い。

サンドラが右手で、背後の椅子に腰かけているもうひとりの美女を示した。

「あれは、わたくしの妹のアレクシーナ・ヴィル・マーハ」

左の椅子から立った美少女が、姉と同じように裕也の前に膝をつき、涼やかな微笑みを向けてくる。

「はじめまして、裕也くん。わたしのことは、シーナと呼んで」

「シーナ殿下よ！　殿下をつけて！」

また背後から母の忠告が飛んできた。父はあいかわらず困惑顔。

裕也は疑問を抱きながら、ていねいな口調をくずさなかった。

「はじめまして、シーナ殿下」

「受け入れてもらって感謝するわ、裕也くん」
シーナの年齢は十代後半だろう。
こちらも金髪だが、滝のように長く流れ落ちるストレート。
瞳は、沖の海のように深い青。姉と同じように端正な美貌だが、きりっとひきしまった印象は対照的。裕也が王女と聞いて頭に浮かぶ夢の国のアニメ映画のプリンセスたちとは、かなりイメージが違う。
頭には精緻な銀のティアラ。
ロングドレスは真珠を思わせる光沢のある白で、サンドラに比べて装飾は少なめだ。胸元はやはり大きく開いて、前にせり出す乳房の肌を見せつける。バストサイズは姉よりも少し小さいが、堂々たる巨乳だ。
サンドラがさらに自分の背後に立つメイドを示した。
「あれは、わたくしたちのお付きのメイド長のエリルです」
「はじめまして、エリルさん」
裕也が言葉をかけると、メイドは右手の旗竿を支えたまま頭を下げる。
「エリルでけっこうです。自分は裕也殿と呼ばせていただきます」
「でも、会ったばかりなのに、呼び捨てなんて」
「メイドは呼び捨てにするものです。ましてや裕也殿はサンドラ陛下にとって重要な御方

ですから」

そう告げる間も、ていねいな口調とは裏腹に、手前の二人とは対照的な値踏みをするような視線を裕也へ向けてくる。

エリルは二十歳くらいだろうか。栗色の髪を肩できれいに切りそろえて、頭にメイドキャップをのせている。瞳も同じ栗色。

漫画やゲームで培われた裕也のイメージでは、メイドはいつもニコニコしているやさしいお姉さんだが、かわいいキャップの下のエリルの顔つきは、美しき格闘家という雰囲気だ。吊り上がった眉は凛として力強く、切れ長の眼光鋭い目も裕也の隙を探っているように思える。

明るいブルーの服は半袖で、膝までのミニスカート。その上に、これまたかわいい白いエプロンドレスをつけている。脚にも、さらにかわいい白いニーソックス。

エリル本人と身につけている衣装はミスマッチだが、それが不思議と魅力的に見えた。

裕也は目の前の二人と、奥のメイドへ交互に視線を走らせてから、ようやく口を開いた。

「あの、それで、サンドラ陛下。これはどういう仮装パーティーなんですか？」

「裕也、なに言ってるの！」

あわてる母親を、サンドラが笑顔で制した。

「お母様はご心配なく。わたくしが裕也様に説明します。なるほど、地球の人がそう思わ

れるのは無理からぬことでしょう」
「地球人と言われても」
「しかしながら仮装パーティーなどではありません。わたくしと妹とメイドは異世界にあるマーハランド王国の者です。本日、異世界から日本へ到着しました」
「そういう設定の仮装なんだ。元ネタがなんだか知らないけど、どうしてぼくの家でやってるんですか？」
サンドラの背後で、室内で風もないのに、紅白二輪の薔薇の旗がバサリと音をたててなびいた。旗竿を握るメイドのエリルが鋭い瞳で裕也をにらみつけて、またけわしい声をあげる。
「アレクサンドラ陛下のお言葉が信じられぬと言うのか！」
裕也は思わず身を縮こまらせた。今にもエリルが旗竿を槍のように構えて、とがった先端を喉に突きつけてきそうに思える。
裕也の全身を包むヒヤリと冷たい空気を、サンドラがほがらかな笑顔で暖かく溶かした。
「もう、エリルったら。いちいち文句をつけないの。話が進まないでしょう」
「申し訳ありません、陛下。出過ぎたまねをしました」
エリルが頭を垂れると、サンドラは再び裕也へ語りかける。
「わたくしたちが異世界から来たという証拠を、お見せしましょう」

サンドラが右手をひらりと動かすと、いきなり手に棒状の物体が出現した。サイズはバトントワリングに使うバトンと同じだが、色はピンクで、一方の先端に鮮やかな黄色い薔薇の花を模した装飾が咲いている。

「マジックですか？」

裕也の口を衝いた言葉に、サンドラがうなずく。

「いかにもマジックです。地球では、マジックには二通りの意味があると聞きます。ひとつは仕掛けを使った手品。でもわたくしが使うマジックは、もうひとつの意味の、正真正銘の魔法なのですよ」

サンドラが黄薔薇のバトンをひと振りすると、その動きに合わせて周囲に黄色い花びらがいくつも現れて、ヒラヒラと舞って消えた。

美しいショーに見とれる裕也の身体が、正座の姿勢のまま、畳を離れて空中に浮かび上がった。

「えっ、えええええっ！」

床から一メートル半ほどの高さで静止した裕也は、反射的に手足をわたわたと動かした。どこを探っても、指にも、足先にも、なにも触れない。そもそも自分の身体を支えるなにかが触れている感覚がなかった。それなのに身体は空中にとどまっている。

「なにこれっ!?　どうなってるんだ!?」

キスをしたまま裕也とサンドラは抱き合う。裕也の胸で女王の爆乳がつぶれて、平らに広がった。

裕也は布越しに乳房の圧力を感じて、もともと昂っていた心臓の鼓動が、一気に加速した。高揚する裕也の唇にぬるぬるした温かいものが挿しこまれて、前歯の列をなぞられる。

（舌だ！　サンドラ陛下が舌を入れてきてるっ！）

前歯を開いて、女王の舌を受け入れ、自分の舌と触れさせた。まるで見知らぬ生物の触手のごとく、舌が舌にからみついてくる。大人の女らしい大胆な舌づかいに翻弄されて、裕也の脳がぐらぐらと煮立つ。

（気持ちいい！　キスって、こんなに気持ちいいんだ！）

ふいにキスが終わった。裕也の口内から舌が引き抜かれ、唇が離れていく。

「あ」

と、未練の声を洩らす裕也の胸から、乳房も離れる。つぶれていたバストがもとの形にもどって、艶めかしく揺れる。

サンドラが瞳を潤ませて、じっと裕也の顔を見つめる。

「わたくしとセックスをしてくださいますか」

「はいっ！」

ほとんど同時に、裕也は上ずった声で返答していた。キスの前の堅い男の決意など、完

全に雲散霧消して、燃え盛る男の欲望に突き動かされている。
「サンドラ陛下とセックスしたいです！」
「感謝いたします、裕也様」
女王が艶然たる笑顔を見せるとともに、それもまた魔法なのか、ピンクのネグリジェがひとりでに上半身を滑り落ちた。
裕也の前から薄い布が消えて、果物の皮を剥いたように、色白の肌が現れる。今まで直接は見えなかった肩や腹のなめらかな輝きが、裕也の目を射た。
裕也の視線は、あらわになったピンクのブラジャーに集中する。サンドラは大きく張ったブラジャーのカップを、裕也へ向かって突き出した。
「裕也様の手で取ってください」
返事する間も惜しくて、裕也は無言のまま両手でブラジャーの左右のカップをつかんだ。またもや魔法なのか、背中のストラップが自然にはずれて、簡単に胸から離れた。
どっ！　と乳房があふれる。
ブラジャーから解放された乳房が、実際に増量するわけがない。しかし両手にカップを握ったままの裕也の目には、バストサイズがひとまわり大きくなったように映った。
サンドラの胸は自身の重量でやや位置が下がっているが、きれいな球体だ。
白い乳球の先端には淡い桜色の乳輪が咲き、中心から乳首が突き出している。肉筒のサ

イズは、小指の第一関節の先ほどもあった、
裕也は生まれてはじめて実物の乳首を見るが、それでもはっきりとわかった。
「乳首が大きい！」
つい口に出してから、しまった、と思う。
「すみません。変なことを言って」
「いいえ。変なことではありませんわ。乳首が大きいのは、わたくしの魅力だと自負しています」
サンドラは自分の手で下から乳房をすくい上げて、両手の人差し指で、左右の乳首をこすってみせた。指に押されて、桜色の先端がくねくねと上下左右に動く。自慰じみた行為を見せられて、裕也はますます身体が熱せられた。
「裕也様の言葉はうれしい称賛です。どうぞ、ご存分にわたくしの胸を味わってください」
裕也の手からブラジャーが離れて、二人が正座してつき合わせる膝の上に落ちた。前に出した十本の指が、左右の乳房を握る。男子高校生の手にはまったく収まらない乳球に、指が埋まった。
（すっごくやわらかい！）
指から伝わる驚嘆と感動が、裕也の身も心も埋めつくす。はじめて知る女の胸は、よく知っている男の肉体とはまったく違う感触だ。とても同じ人類とは思えない。

自分の指につかまれて、きれいな球体がくにゃりと形を変えている姿が、たまらなく艶めかしく愛らしい。

触覚と視覚だけでなく、すぐに聴覚も刺激される。つかんだ爆乳を凝視する裕也の耳に、甘い音色が聞こえた。

「あああ」

ハッと顔を上げると、サンドラの輝く緑眼と目が合った。瞳はじっとりと濡れて、熱い視線をそそいでくる。

「ごめん。痛いですか」

「いいえ。すてきな心地よさです。裕也様に胸を握られて、感じてしまいますわ」

そう告げるサンドラの白い頬が、朱色に染まっている。これも裕也がはじめて見る女の表情だ。誘われるように両手の指が動き、乳肉を揉みこむ。女王の表情が蕩けるように変化して、開いた唇からさらに甘い声があふれた。

「あんっ！　あはああ」

「サンドラ陛下、あの」

溶けるような笑みが、女王の上気した美貌に浮かぶ。

「わたくしは胸が感じやすいんです」

その告白の言葉だけで、裕也の背筋がゾクゾクと痺れて、股間に熱い炎が燃える。

「いやらしい女だと思いますか」
「すてきです！」
「では、わたくしも裕也様の御身体に触ってもよろしいですね」
返事を待たずに、サンドラの両手が正座するパジャマのパンツの太腿に置かれた。十本の指と手のひらが上下左右に這いまわる。
「あああ、予想以上に裕也様の脚の筋肉はたくましいのですね」
裕也はスポーツに打ちこんでいるわけではないが、アウトドアは好きだ。おかげで身体は頑健だ、と説明することができなかった。生まれてはじめて女の手で太腿をなでられて、未知の快感が全身をすみずみまで駆けめぐり、まともな言葉を発することができない。
「はああ、陛下の手が、ああ」
サンドラの両手が両脚の付け根まで登った。そのままパジャマのパンツの上から股間をまさぐられるか、あるいはパンツの前開きから指を入れられるか、と裕也は期待する。だが、指はまた太腿を後退していく。
「あっ……」
裕也は未練の声だけを洩らした。直接的な願いを口にすると、この奇跡の時間が終わってしまう気がして、言葉にする勇気はなかった。
言葉にするかわりに、女王陛下の爆乳を揉むことに専念する。片手に余る女のシンボル

を下からすくい上げると、ずっしりした重さが手のひらにかかった。その重量が快感だ。重さがそのままサンドラの魅力になる。

指に力をこめると、乳房が変形して、乳肉が裕也へ向かってムリムリと搾り出される。

「はああ、いいです。裕也様、ギュッとしてください。もっとわたくしの胸をギュッとしてくださいませ」

一国の統治者らしい力のある語気に、小さい子供のような言葉づかいが混じるのが愛らしくも艶めかしい。

「はい、陛下」

女王の熱い命令に従って、裕也は指を握ってはゆるめる。握力を強くすると、サンドラはなにかをこらえているような顔つきになり、唇を強く閉じる。

「んく、んん……」

指の力を抜くと、唇が少しだらしなく開いて、湿った喘ぎがこぼれ落ちる。

「はああ……」

指の動きに合わせて盛り上がる乳球の先端では、二つの大粒乳首がさらにピンッと勃ち上がり、フルフルと揺れて、裕也を誘う。

誘惑のダンスに、すぐに乗せられた。裕也は自分の手で搾り出した右側の乳肉に、顔を強く押しつける。汗でしっとりとするやわらかい肌に、顔面が包まれる。唇に大粒乳首が

当たり、特異な肌触りに驚嘆のうめきをあげさせられた。
「んんんっ！」
（本当に硬い！　本当に、女の乳首は快感で勃起するんだ！）
感銘を受けたまま、乳首を咥える。激しく吸い上げる。
「むっううん！」
口の中に乳首だけでなく乳輪も、さらにその周囲の乳肉も流れこんできた。鼻と口をふさがれて息苦しいのも忘れて、舌で口内の乳首を舐める。
はじめて知る味が、舌の上に広がる。裕也が持つ言葉では表現できない味覚。男の本能を掘り起こす美味だ。
（これが女王陛下の味！）
本能に命じられるままに、懸命に乳首とまわりの乳肌を舐めまわす。
「はうっ、うんんん、乳首がとてもすてきに感じますう！」
サンドラの嬌声が一段と高くなり、裕也の太腿をなでまわしていた両手が、布越しに筋肉をキュッとつかんだ。正座した脚に乗る女王の豊かな尻が、くねくねとうねる。
「はああ、左の乳首も舐めてくださいませ」
サンドラの懇願の言葉がなくても、裕也は息を止めるのが限界になっていた。口から乳首を吐き出し、右胸から顔を離して、大きく息を吸う。

「してっ！　裕也くんのペニスを、わたしの中に入れてっ！　早く入れてくれないと、死んでしまううっ！」

自分がどれほどあさましいことを口走っているのか、ちゃんとわかっている。もはや恥辱も誇りも考えていられなかった。

「あああ、裕也くん、お願いっ！」

大粒の涙を浮かべたシーナに見つめられて、裕也は男根が硬くいきり勃つ。すでに限界まで勃起していたはずだが、スラックスの中からビキビキッと不穏な音が聞こえるようだ。苦しげに悩乱するプリンセスの姿を見て肉棒が反応することに、罪悪感もあったが、今のシーナはたまらなく扇情的だ。

「早くっ！　裕也くんも脱いで！」

「はいっ」

プリンセスの激しい叱責を浴びせられて、裕也は飛び跳ねるようにベッドに立ち上がり、超高速で身につけた制服と下着を脱ぎ散らかした。スラックスとトランクスを一度に下ろすと、たぎる肉棒がそそり勃つ。シーナが放射する肉欲のエネルギーを受けて、今にも爆発寸前だ。

「殿下、行きます！」

「早くっ！」

裕也は勢いをつけてベッドに膝をつく。右手で肉幹をつかみ、左手でシーナの右足をかかえて、わななく女性器に突撃した。

亀頭に押し開かれた膣口から、とぷっ、と愛液があふれ出て、肉幹とシーツを濡らす。裕也から魔力を流し入れられることで、すでにシーナの体内はドロドロに蕩けていて、燃え盛る男の武器を難なくすべりこませた。

「ひっ！」

空気を切り裂くような叫びが、裕也の鼓膜をたたいた。強烈な圧力が、男根全体を握りつぶすように締めつけてくる。

「うわあっ！　殿下、きつい！」

姉のサンドラも強く締めつけてくるが、それは両腕で抱きしめられて歓迎されているようだった。シーナは侵入者を猛然と排除するかのように、ひたすらきつく圧迫するばかり。

（これが処女の締めつけなのか！　こんなことで、負けてたまるか！）

両腕でガッチリとプリンセスの両腿をかかえて、渾身の力をこめて腰を引く。膣口から肉幹が姿を現すと、鮮血が流れ出て、シーツを赤く染めた。

流血とともに、シーナの叫びが著しく変化する。

「ひっ！　きひい！　ひいいいいいいいいい……気持ちいいっ！」

シーナの膣内に挿入されたペニスから、魔力の奔流が洪水のように、押し寄せてくる。

たちまち全身が裕也の魔力に浸されると、拷問だった疼きが一転して快感になった。
「あはあああ、いいっ！　たまらないっ！　もっと、もっと裕也くんの魔力をわたしにちょうだいっ！」
本来あるはずの処女喪失の激痛は、まったく感じられない。疼きが反転したときに、いっしょに痛覚も逆転したようだ。その異常さが一瞬だけ意識にひっかかったが、すぐに悦楽の潮流に押し流されていった。
自分の手で胸と女性器を愛撫するときとは違い、性感帯だけではなく全身が愉悦の湯に洗われている。疼きの激しさから恐れていた猛々しい快感ではなく、身体がゆったりと溶けてしまうように甘い悦びだ。
雄大な魔力に包みこまれる未知の境地に、身も心も、そして魂も委ねて、シーナは自然と歓喜の言葉が出てしまう。
「はあああ、気持ちいい……なにもかもが気持ちいいわ……あっううん、すべてが輝いているわ……」
「ぼくも気持ちいいです！」
裕也もかすれた声で返事をする。シーナ自身は夢のような快美の波にたゆたっているが、処女を失ったばかりの膣の粘膜は、今も男根を容赦も遠慮もなく喰い締めていた。裕也はプリンセスの隘路（あいろ）の中を、努力してペニスを引き抜き、また押し入れる。童貞を卒業した

ばかりらしい単調な動きをくりえしているだけで、肉棒全体を強くこすられる刺激に酔いしれた。

「くううっ、もう、ダメだあっ！」

シーナの恥態と処女孔の狭隘さが、裕也をいとも簡単に限界に到達させた。少しでも時間を伸ばそうと思ったが、気持ちよすぎて女肉をえぐる勢いをゆるめることができない。逆に身体が射精を求めて、下半身の動きをいっそう加速させる。

「シーナ殿下に出しますっ！」

蕩けきって威厳を失った王家の美貌が、コクコクと縦に揺れた。

「出して！　はあああ、わたしの中に射精してえっ！」

プリンセスの甘い勅命が、射精への最後の一撃となる。裕也は背骨を焼く高熱に煽られて、ひときわ強く腰を突き入れ、亀頭を最奥まで届かせた。

「出るううう!!」

「あああああっ！」

シーナは体内で熱い粘液がぶちまけられると同時に、最上質の魔力がそそがれるのを鮮明に感じた。身体の中心で快感と魔力が融合して、全身を駆けめぐる。

シーナと深くつながったまま射精の余韻に浸る裕也の目に、信じられない光景が映った。勃起したままの乳首とクリトリスが再びグッと高さを増して、三つともに小指の第二関

節までの大きさになる。そそり勃った三本の女の快感のシンボルから、パリパリと銀色の細い電光が放たれる。
魔法の知識がない裕也も直観した。シーナの体内に納まりきらない魔力が放出されているのだと。
「あっおおおおおおうううう！　果てるうううううっっっ!!」
シーナの絶頂の叫びと同時に、乳首と女芯から放たれる三条の銀の電光が、天井へ向けて高く放たれる。
「うううううぅぅぅぅぅぅ……」
叫び声が鎮まっていくとともに、電光が消失した。乳首とクリトリスも縮み、シーナの本来のサイズにもどった。
最後の声が途切れると、そのままシーナはまぶたを閉じて眠りに落ちた。
裕也がそろそろとペニスを引き抜くと、開いたままの膣口から精液と愛液がとろりとあふれる。
眠れるプリンセスを見下ろして、裕也は精液を拭こうと、背後のベッドサイドにあるティッシュへ顔を向けた。目の前にエリルの顔がある。
「うわ！」
「姫様のお世話は、自分がする。裕也殿は先に浴室で身体を洗え」

「……んくう……うううう……」
反対に裕也は大きな感嘆の声を放った。
「きついっ！　ミナ陛下の中、すごくきついです！」
処女ならではの狭隘さと猛烈な圧力に襲われて、もともと動かせない裸身をさらにきつく縛られたようだ。
肉幹を打ちこまれて広がった膣口から赤い鮮血が滴り、裕也の股間とソファを染めた。処女喪失の流血と交換するように、膣内のペニス全体から膨大な魔力がそそがれてくる。ついさっき浴びせられた精液から流れこんだ魔力の何倍もの量。
魔力の奔流が体内をめぐると同時に、破瓜の苦痛が反転して、深い快感に浸された。精液を浴びたときの全身が痙攣する過激な快感ではなく、全身の内側と外側を同時にやわらかく包みこまれるような、不思議とやさしい愉悦に満たされていく。
「あああ、気持ちいいわ。これがメリンダ・エメル・マーハ陛下由来の悦び」
もともと絶頂寸前のままおあずけをされていたミナは、温かい歓喜の大波に持ち上げられて、待ちに待った悦楽の頂点へ到着した。
「はあああああ、果てるうううう!!」
テレザがメイド人形たちに命令したのか、裕也の肩と腕から六本の手が離れた。
裕也は解放を喜ぶよりも前に、両腕を現女王の背中へまわして、強く抱きしめていた。

小柄な身体が腕の中にすっぽりと入り、黒いブラジャーに納まっている豊かな乳房が胸板に押しつけられて柔軟にたわむ。

ペニスを女王の肉に強く包まれ、腕で女王の身体を強く抱くだけで、裕也は三度目の射精のスイッチが入った。一段と熱い快感の流れが、尿道を焼いて、亀頭へと疾駆する。

「あああああ、ぼくも出るう!!」

ぶるっ！　と、全身を震わせて、より強くミナを抱き、唇を重ねた。

ミナはキスを受け入れたが、すぐに顔を振って、甘く溶けた声をあげる。

「あんんん、出されている！　わたしの中に熱いものが出されているわ！　蕩けそう！　あああ、身体が蕩けちゃううう！」

膣内だけでなく、全身に精液と魔力が染みこみ、体内がいっぱいになった。挿入と同時に翔け昇ったエクスタシーの頂点から、さらに高い場所へ噴き上げられる。

「果てちゃう！　また果てるうううっ!!」

抱き合う二人の胴体の狭間から、三つの細い電光が出てきて、踊るように揺らめいた。ミナはそれが自分の身体に納まりきらない裕也の魔力であり、膨張した二つの乳首とクリトリスから発しているとわかる。

「あああ、魔力があふれている！　気持ちいいっ！」

そこでも終わりではなかった。スパッツの尻たぶに裕也の両手がまわって、十本の指が

強く食いこんだ。
「もっとミナ陛下としたい！」
「えっ、はおうう！」
尻を大きく揺さぶられて、体内を硬い肉槍にかきまわされる。新たな快感が全身を巻きこんで、渦潮のように大きくうねった。
「あああああ、すごい！　気持ちよすぎるう！　気持ちいいのが止まらない！」
絶頂から下りることを許されずに、新たな快感を次々と送りこまれる。
いつの間にかブラジャーのカップがずれて、あふれた乳房と乳首が裕也の胸板にこすりつけられた。チラチラとミナの目に入る二つの乳首は、予想した以上に大きい。小指の第二関節ほど膨張したピンクの肉筒が、裕也の肌にこすれるたびに細い魔力の電光を発して、乳肉を痺れさせた。
胸と女性器の快感がひとつに融合して、強くやさしく満たされ、ミナは何度も言葉にしていく。
「あああああ、また果てちゃう……はうう、果てるう……果てるううんん……」

*

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! キルタイムコミュニケーション 検索